

野菜類の高温・少雨対策について

令和 8 年 7 月 8 日
農業総合センター
作物園芸部野菜科

1 野菜類における高温・乾燥の影響

- (1) 直播き野菜における発芽不良
- (2) 萎れ、葉焼け、落花
- (3) 果実品質低下（トマトの放射状裂果・尻腐果、キュウリの曲がり果・尻細果・フケ果、ピーマンの日焼け果等）
- (4) 病害虫の発生拡大（ハダニ類、アブラムシ類、うどんこ病等）
- (5) 薬剤散布時の薬害の発生 等

2 高温・乾燥への対策について

- (1) かん水
朝夕の気温が低い時間に行うのが理想だが、日中でも水分不足が疑われる際には積極的にかん水する。果菜類では、かん水チューブを用いた少量多回数が望ましい。また、畦間かん水を行う場合は、長時間水をためないように注意する。
- (2) 施設における換気、遮光、ミスト噴霧
側面と妻面を開放して換気を図り、遮光・遮熱資材や塗布剤を利用する。また、ミスト噴霧は、気温上昇を抑制し、作業環境を改善するとともにトマトやキュウリでは品質向上効果がある。
- (3) 敷きわら、白色資材の利用
敷きわら、白黒マルチ、白色防草シートは地温上昇抑制効果がある。
- (4) 草勢の維持
果菜類やマメ類は、不良果や不良莢を早めに摘み取り、株への負担を軽減させ、葉面散布、液肥やペースト肥料の土壌かん注を行う。
- (5) 薬剤散布
高温時は薬害の発生が心配されるので、早朝または夕方に散布することを徹底する。
- (6) 収穫物の鮮度保持
キュウリのフケ果（ス入り果・先膨れ果）の発生が懸念されるため、収穫物を直射日光に当てない等、品温の上昇を防ぐ。
- (7) 遅植え栽培、遅播き栽培の導入
7～8月に定植や播種するキュウリの遅植え栽培やサヤインゲンの遅播き栽培は、春植えの作型に収量は劣るものの春に植えた株の品質が低下してくる頃に良品が収穫できる。

3 農業総合センターにおける高温対策に関する成果について

- (1) 夏秋トマトの夏期遮光による裂果軽減効果（H20 普及成果）
遮光率 50%の遮光幕を使用して 9:00～16:00 の時間帯で遮光すると、裂果が軽減し、可販果収量が増加する。

- (2) 夏秋雨よけキュウリに適した遮光資材の設置方法 (R2 参考成果) 定植後から遮光資材を屋根部分に外張り展張し、梅雨時期に一度撤去した後、再度展張する方法が適している。
- (3) トマト品種「りんか 409」のミスト噴霧を利用した高温対策 (R5 参考成果)
「りんか 409」の夏秋栽培において、ミスト噴霧によりパイプハウス内の気温と飽差上昇が抑制され、放射状裂果の発生が抑えられる。
- (4) 夏秋雨よけキュウリにおけるミストと日射制御型遮光の併用による高温対策 (R6 普及成果)
夏秋雨よけキュウリにおいて、ミストと高温時期遮光 (高温時期のみ遮光資材を常時展張) を併用すると減収するが、ミストと日射制御型遮光 (設定した日射量以上で自動遮光) を併用すると収量を確保しつつ施設内環境を改善できる。
- (5) 夏季高温期の収穫作業が軽減でき、翌春の収量が増加するアスパラガスの夏季追加立茎法 (R6 普及成果)
「ふくきたる」を用いたアスパラガスのハウス半促成栽培において、春どり後の立茎に加え 7 月中下旬に追加立茎を行うと、その後の若茎数が減少し、高温期の収穫作業を軽減できる。また、翌春の春どり収量は増加し、年間収量は慣行栽培と同程度となる。